仙台・清月記

遺体「エンバーミング」導入

仙台市の冠婚葬祭業、清月記が遺体を保存・修復する技法「エンバーミング」＝?＝を社内で行う体制を整えた。元気だった頃により近い姿を長く保ち、遺族が心行くまで別れを惜しむ時間を持てる。東日本大震災の犠牲者の改葬などに関わった社員が、遺体に対しベストを尽くせる環境をつくりたいと提案した。

（丸山磨美）

エンバーミングに用いる機器類を確認する釜石さん（左）と山口さん＝仙台市青葉区の清月記エンバーミングセンター

エンバーミングは遺体に防腐、殺菌消毒処置を施して感染症などを防ぎ、長期間、衛生的に保つ技法。遺族の意向に沿い、事故による損傷や闘病によるやつれなどを一定程度整えるほか、顔色の調整、化粧などを行う。

同社は昨年8月、青葉区本町の葬祭会館内に専用の設備を備えたエンバーミングセンターを開設し「エンバーマー」と呼ばれる有資格者を1人配置。今年2月に2人に増員し月90の遺体受け入れが可能になった。

①遺族が遠方に住んでいる、仕事で都合がつかないといった事情があり、葬儀日程に余裕を持たせたい②火葬場が混んでいる③外国人の遺体を母国に移送する―などのケースを想定する。

長期間・衛生的に安置、生前に近い姿

お別れ 心置きなく

納棺師らによる一般的な遺体保全と異なりドライアイスは不要で、頬や手に触れるなどスキンシップもしやすいという。「遺体は葬儀の主役。より良い状態の遺体と別れの時間を過ごすことはグリーフ（悲嘆）ケアにつながる」と菅原裕典社長(63)は説明する。

宮城県では他に納棺の専門業者1社が手がける。清月記は遺族の要望があれば外注してきたが、事業推進室総括部長西村恒吉さん(50)が内製化を提案した。

震災後、犠牲者の多さに火葬が追いつかない事態が生じ、同社は石巻市で犠牲者の遺体の仮埋葬、掘り起こし（改葬）に関わった。西村さんは「通常ではあり得ない数と状態の遺体に対し、十分なことができず後悔があった。遺体に対しベストな取り組みをする責任がある」と語る。

同社納棺師だった釜石将崇さん(45)が関東の専門学校で2年学びエンバーマー資格を取得。「衛生について学び、できることが増えた」と言う。新たに加わったエンバーマー山口貴美子さん(37)は「寝ているような姿を目指している」と話す。これまで依頼が約80件あり、好評という。

同社のエンバーミング料金は18万円から。

? エンバーミング　米国で南北戦争（1861～65年）を機に普及し、国内では1988年に初めて行われた。事業者らでつくる日本遺体保全協会（神奈川県）の自主基準で、遺体の保全期間を死亡判定日から最長50日と定める。協会ホームページによるとエンバーミング施設は全国に85カ所、東北は秋田を除く5県に9カ所ある。